



NPO法人キッズドア主催のボランティア説明会。  
中学生支援事業には、多くの大学生ボランティアが参加している。

## 第8回

# 施設の子どもたちも 大学に行こう!!

ゴールドマン・サックスとの協働事業

前号に続き、東京ボランティア・市民活動センターがグローバルな金融機関であるゴールドマン・サックス（以下、GS社）と協働で2010年から実施しているゴールドマン・サックス・ギブズ・コミュニティ支援プログラムについてご紹介します。

このプログラムは、GS社の社員がボランティア活動を通じて児童福祉施設の子どもたちと触れ合うなかで、子どもたちの大学進学には大きな壁があることを知り、有志で奨学金を出すなどの支援を行ったことから始まりました。そして、一人でも多くの子どもたちが大学進学への夢をかなえられるよう、ゴールドマン・サックス・ギブズ・コミュニティ支援プログラムとして、支援の規模を拡大しました。

本プログラムは貧困の連鎖を断ち切るため、児童福祉施設の子どもたちを対象とした『進学支援プロジェクト』、ひとり親家庭を対象とした『ひとり親就労支援プロジェクト』、そして、子どもたちを支援している団体の組織力強化に社員ボランティアが取り組む『プロボノ・プロジェクト』の3つのプロジェクトから成り立っています。

今回は、児童福祉施設の子どもたちが大学に進学することを支援する『進学支援プロジェクト』をレポートします。

## 施設の子どもたちが 大学に進学できない理由

厚生労働省「社会的養護の現状について」（平成25年3月版）によれば、最終学歴が大学卒業以上である割合は約54%となっていますが、東京都内の児童養護施設出身者では11%にとどまっています。また、独立行政法人労働政策研究・研修機構の2009年の調査では、こうした最終学歴の違いは収入の格差につながり、高卒と大学・大学院卒を比較した場合、生涯賃金ベースで、男性で4000万円、女性では6000万円の差が生じています（定年まで。退職金を除く）。

児童養護施設の子どもたちの大学進学率が低い理由のひとつは、経済力です。施設で暮らす子どもたちはさまざまな事情で親や家族と暮らすことができず、大学進学について家族からの支援が受けられない子どもたちが多くいます。このため、子どもたちは高校の時からアルバイトを始め、18歳で施設を出ていくまでに、自立生活のための資金だけでなく、進学のための資金も貯めておかなければなりません。こうした子どもたちの進学を支援する行政の助成金や民間の奨学金もありますが、膨大な費用の一部を補うだけで、子どもたちは複数のアルバイトをしながら暮らしており、大学

に通う時間もなく、ましてや、サークルやクラブ活動などを楽しむ余裕はないというのが現状です。

2つめの理由は、施設の子どもの多くが学習に問題を抱えていることです。施設に入る前の不安定な生活の中では、多くの子どもたちが学校に通ったり、落ち着いて学習できる状況ではありませんでした。そのため学校の授業についていけない子どもたちがいます。行政からも中学生の塾代への助成金が出ていますが、塾に通うことが難しい子どもたちもいます。このため、大学進学は無理だとあきらめてしまっている子どもたちも少なくありません。

### 『進学支援プロジェクト』の中の4事業

ゴールドマン・サックス・ギブズ・コミュニティ支援プログラムは、4年間の総額が3億4000万円という巨大な事業です。そのうちの2億4000万円が『進学支援プロジェクト』として使われています。

本プロジェクトを開始するにあたって、本センターでは、統計的なデータを収集・分析するとともに児童福祉施設の方々にヒヤリングをし、また、NPOやボランティアによる支援体制を作っていました。その結果、貧困の連鎖を防止するために、児童福祉施設の子どもたちの大学進学を支援

することを目的として、①大学進学支援事業、②高校生支援事業、③中学生支援事業、④小学生支援事業の4つの事業が生まれたのです。

#### ① 大学進学支援事業

大学進学支援事業は、毎年3名の奨学生を書類と面接で選考し、4年間の大学の授業料全額を支給します。また、毎月、生活費を4年間支給しており、奨学生がある程度アルバイトをすれば、無理なく大学生活を送れるようになっていきます。

本事業の特徴はアフターケアにあります。事前の調査の中で、子どもたちが施設を出て一人暮らしを始めると、身体的・精神的・経済的に不調になったときに大学を中退してしまうケースもあることがわかりました。そこで、本事業ではケースワーカーを本センターで採用し、施設のスタッフと一緒にアフターケアに取り組んでいます。

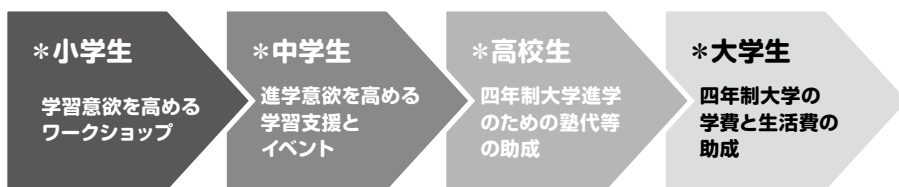
今まで施設の子どもたちは学費を払えそうな大学を選んでいましたが、本奨学金を得ることによって、本当に行きたい大学に進学できるようになりました。また、奨学生が施設の後輩たちのロールモデル（模範となる人）になり、大学に進学することが「夢」ではなく、「現実」となったのです。本事業の課題としては、子どもたちが途中で挫折しないために、精神的なサ

ポートを強化すること、体調や金銭の管理の仕方を教えること、卒業後の就労に向けての支援があげられます。

#### ② 高校生支援事業

本事業では、大学に進学するための受験勉強を応援するために、高校2年生は年間の塾代、高校3年生はさらに夏季・冬季講

## ゴールドマン・サックス・ギブズ・コミュニティ支援プログラム 『進学支援プロジェクト』



小学生から段階的な支援を行い、大学進学につなげていく。

習も追加した金額の塾代を助成しています。毎年、高校2年生6名と高校3年生6名の合計12名が書類と面接で選考されます。

行政から高校生への塾代の助成が無い中、大学進学をめざす子どもたちにとって重要な支援となります。また、塾に通うことは、学力を向上させることだけではなく、進学についての情報やアドバイス、ノウハウなどが得られると大変好評です。

また、上記の奨学生が夏休みの1日、六本木ヒルズの中にあるGS社を訪問し、社員ボランティアとの模擬面接やグループ・ディスカッションなどを行いながら、仕事や進路について、また、困難を乗り越えて夢をどのように実現していくかを考える「キャリア・メンタリング・プログラム」も実施しています。

本事業の課題としては、経済的な負担の大きさから、4年生大学ではなく短大や専門学校への進学や就労を希望する子どもが多いことや、近い将来の自立生活のためにアルバイトをしなければならず、塾に通う時間が取れないという子どもたちが多いということです。

### ③ 中学生支援事業

大学に進学するためには、高校選びが重要となります。前述したように、施設の中

学生には塾代が行政から出ていますが、塾に行かない子どもたちもたくさんいます。学習が嫌いだったり、精神的に不安定な状況にあるために塾に通えないということがその理由です。

そこで、中学生支援事業では、NPO法人キッズドアと連携し、年間5施設において、大学生ボランティアや社会人ボランティアがチームとなって、半年間月2回ずつ、ほぼマンツーマン体制で楽しく学習会を行いながら、進学意欲を高めています。

初回のワークショップでは、将来つきたい仕事やそのための進路を考えるようなゲームをしたり、秋には大学の学園祭を訪問したり、また、ボランティアから大学や仕事の話聞きながら、将来の夢や希望を育んでいます。不登校の子どもや勉強が嫌いでじつとしていられない子どもも参加しており、ボランティアとの学習はとても人気があります。

課題は半年の学習支援が終わった後の対応です。子どもたちが通常の塾に通うようになるか、あるいは、施設の中に継続的な学習支援体制を作ることが必要となります。

### ④ 小学生支援事業

学校での学習が難しくなるのは小学校3〜4年生からだと言われています。また、



高校生支援事業の中で、塾代の支援を受けながら、美術大学を目指す学生作品。

思春期にも入り、いじめや不登校などの問題も出てきます。そこで、本事業では子どもたちのコミュニケーション力をつけることよって、学校に通うことが楽しくなり、学習意欲が高まることをめざし、NPO法人JAMネットワークと連携しながら、毎年5〜7施設において、子どもたち向けのワークショップ（以下、「ことばキャンプ」）を全6回開催しています。毎回、数名の職員も参加しながら、ワークショップの運営をサポートするとともに、コミュニケーション力の育て方を学んでいます。また、「ことばキャンプ」の実施前後には、全職員を対象とした研修を3回実施しており、本事業の意義や方法論を施設全体で共有できるようにしています。

最初は全く自分の意見を言えなかった

## 『進学支援プロジェクト』支援状況(第1期～第2期)

		大学進学支援事業		高校生支援事業		中学生支援事業		小学生支援事業		合計
		第1期	第2期	第1期	第2期	第1期	第2期	第1期	第2期	
対象施設		児童福祉施設※		児童養護施設						
対象年齢		18歳～22歳		16歳～18歳		12歳～15歳		9～12歳		
参加者数	子ども	3名	3名	12名	11名	46名	71名	40名	62名	248名
	職員	—	—	—	—	5名	5名	105名	220名	335名
	施設	3施設	3施設	10施設	7施設	5施設	5施設	5施設	7施設	45施設

※児童福祉施設＝児童養護施設、自立援助ホーム、母子生活支援施設、児童自立支援施設

り、ファシリテーターの話をじっとして聞いていられたかった子どもたちも、ゲームやおやつを楽しみながら、最終回には、自分の好きなこととその理由について皆の前で堂々と発表できるようになります。その姿を見て、施設職員が感動して涙することもあります。

課題としては、子どもたちのコミュニケーション力をどう継続的に育てていくかということがあります。都内の児童養護施設職員の研修カリキュラムに入れたり、職員だけでなくボランティアの参加などが考えられるのではないのでしょうか。

### 進学支援プロジェクトのこれから

当初4年間の計画でスタートした『進学支援プロジェクト』は、既に3年目を迎え、今後の方向性を検討しています。児童福祉施設の子どもたちへの進学支援をさらに拡大していくためには、GS社からの支援だけでなく、より広く社会からの支援が必要です。

まず、行政の中学生を対象とした塾代の助成を高校生にも拡大したり、民間企業の塾だけではなく、NPOによる学習支援にも活用できないでしょうか。子どもたちは多くの社会人や大学生のボランティアと一緒に学ぶことによって、学力だけではなく、

自己肯定感を高めたり、仕事や進学について考えたり、社会性を育むこともできるからです。

また、多くの企業の社会貢献活動や社員のボランティア活動にも期待したいところです。現在、塾を運営している企業の社員がボランティアとして参加しながら、施設の中で塾を開催したり、教材やテキストを学習支援NPOに無料で提供しているところもあります。さらに、企業や市民の寄付による大学進学のための奨学金・助成金をもっと増やしてほしいと思います。その際には、奨学生が中退せずに大学を卒業し、就労していくことをきめ細やかにサポートする体制も必要です。

昨年、国際連合のユニセフの研究所が発表した先進諸国における子どもの貧困についての調査では、日本の子どもの相対的貧困率はOECD（経済協力開発機構）35か国中9番目に高く、子どもの6人に1人が貧困であるという結果がでています。児童福祉施設の子どもだけではなく、経済的・社会的な理由で教育が受けられない日本の子どもたちをどのように支援していくのか、日本社会全体で取り組まなければならない課題であるといえるでしょう。

河村暁子

（東京ボランティア・市民活動センター）